

おほとものさかのうへのいらつめ
大伴坂上郎女の怨恨の歌一首 并せて短歌

六一九番

おしてる 難波の菅の ねもころに 君が聞こし
て 年深く 長くし言へば まそ鏡 磨ぎし心を
許してし その日の極み 波のむた なびく玉藻
の かにかくに 心は持たず 大舟の 頼める時
に ちはやぶる 神か放けけむ うつせみの 人
か障ふらむ 通はしし 君も来まさず 玉梓の
使ひも見えず なりぬれば いたもすべなみ ぬ
ばたまの 夜はすがらに 赤らひく 日も暮るる
まで 嘆けども 験をなみ 思へども たづきを
知らに たわやめと 言はくも著く たわらはの
音のみ泣きつつ たもとほり 君が使ひを 待ち
やかねてむ

反歌

六二〇番

はじめより 長く言ひつつ 頼めずは かかる思
ひに あはましものか